

労働のない日は雑役の仕事が与えられ、一日中
ゆっくり休むことは少なかった。

宿舎は大部分が私達の手で急造した倉庫のよう
なものに小さな窓をつけたお粗末なもので、暖房
はペーチカ式のもので、二段ベッドで一人一畳位
の広さであった。

入所してから一年位過ぎ、病人も死者もやっと
少なくなりかけ、ラーゲル内が落ち着いた頃から
民主化教育が行われ始めた。友の会（会長 松原
某）が結成され、運動が始まった。しかしまだ水
面下で、目立った動きはなかった。

ブカチャーチャの収容所では、私がダモイする
昭和二十二年九月までは目立った動きはなく、軍
隊の組織がそのまま働いていたが、秋以降に軍隊
の組織は全体的に解体されたと聞いている。

以上のような抑留生活をしてナホトカに着き、
何らトラブルもなく日本の地に帰り着くことがで
きた。

半世紀前の思い出の数々

三重県 森 勇生

一、出生から入隊まで

1 大正十一（一九二二）年五月十五日、三重県
久居市庄田町にて出生。

2 昭和十六（一九四一）年三月、三重県立津中
学校を卒業。その後大阪通信講習所高等科に
て通信士の教育を受け、大阪中央電信局外信
課に勤務する。

二、ソ連侵攻前

1 昭和十八年一月十日、関東軍要員として広島
電信第二連隊に現役として入営。同年二月渡
満、満州電信第七連隊第六中隊に配属、東安
省虎林市に駐屯する。

2 昭和二十年四月、電信第七連隊の主力が本土
に転進したため、残留兵力と転入要員、応召

兵等で電信第四六連隊の編成を完結し、無線隊の配属となる。当時の部隊編成は将校四十八人を含む総員千六百七十九人で、第五軍司令部の隷下に入る。

三、ソ連侵攻

- 1 昭和二十年六月中旬、新配備計画に基づき、第五軍司令部の掖河転進に伴い連隊は牡丹江に転営、対ソ連戦に備えて日夜訓練を実施していた。

- 2 八月八日夜、ソ連軍の侵攻により掖河の第五軍司令部に通信中枢を置き、東安第一三五師団、八面通第一二六師団、穆稜第一二四師団との通信連絡の任に当たる。混戦に加うるに激戦となり、磨刀石付近のマンホールの中から、上をソ連軍の戦車が通過する轟音に「俺はここで討死する」と途切れながら戦況の連絡をしてきた戦友の声が、今も耳に残っている。

四、終戦

- 1 掖河の通信中枢には無線機七台を設置して前記各方面との通信連絡に勤務していたのであるが、八月十五日、「正午を期して重大放送があるからこれを傍受せよ」との部隊長命令があった。

普通、電信隊では無線放送とは第五軍放送周波数、関東軍放送周波数、日本陸軍放送周波数が定められている。これが天皇陛下の終戦に関するラジオ放送とは夢にも考えていなかった。こうした状況の中で、一通信所が天皇陛下のラジオ放送を傍受したと報告を受けて終戦を知った。

- 2 昭和二十年八月十六日午前零時を期し、掖河から牡丹江に通じる橋梁を爆破してソ連軍戦車の侵攻を阻止するから、速やかに横道河子に転進して新京の関東軍司令部と連絡せよと命令が下達された。小生は、一個小隊を指揮し三号甲無線機を携行して横道河子に先行したが、途中各部隊が無秩序な行軍で先を争

い、道路は先頭車両が爆破炎上、飛行機による機銃掃射などまさにパニック状態で、目的地に到着したのが夕刻になった。直ちに関東軍司令部との通信連絡に当たる。「速やかに停戦し武器をソ連に交付すべし。関東軍司令長官山田乙三」との生文による無線連絡は今でも忘れない。

3 八月十七日、朝になってソ連戦車が横道河子に侵攻して来た。一部で暴行略奪が始まった。軍使が白旗を自動車に掲げて出発するのを見て何となく涙が出た。「アアこれで終わりか」という虚無感を覚えた。

4 連隊の主力は横道河子で武装解除を受けたが、小生は別途通信所にいたので全体的な様子は不明。軍刀は拳銃とともに裏山に地面深く埋めた。その後海林へ移動収容された。その道中で満人が三八銃の先に赤い布切れをつけて、日本軍の行列を軽蔑の目で見ているのには無性に腹が立った。

五、シベリア抑留地への旅

1 作業大隊が編成されて出発して行った後、残った私達は将校梯団として昭和二十年十一月三日牡丹江駅で貨車に乗車、十一月七日未明になって貨車が動き出した。

2 十二月二日、雪深い中ラーダに到着下車。この時から東京ダモイの夢は消え、いつの日にも祖国日本へ帰ることができるとか、果てしない抑留生活が始まった。輸送途中の様子は既に幾多の戦友が記録されているので省略する。

六、抑留地の生活と労役

1 ラーダ収容所では、昭和二十年十二月から二十一年七月頃まで、住まいは木造半地下式で、毎夜南京虫に悩まされた。作業は炊事用薪取りが主で、一時期、鉄道の路床作りに出た。収容所にはドイツ人、ハンガリー人、ルーマニア人も多くいた。

2 エラブカ収容所

3

カザン収容所

昭和二十二年八月頃からカザンに移動、二十三年六月ナホトカに移動するまで。カザン市は人口約五十万人の都市で、レーニンが卒業したカザン大学があると聞く。住まいは鉄筋三階建、電灯は明るく、快適な収容所であったように思う。作業はグループ別で順番制であるので、どのような作業に当たるか現地に行かないと判明しない。工場の雑作業、港の荷揚げ作業、建築現場の雑役その他などで、

昭和二十一年七月頃ラーダからエラブカブラーゲルに移動、昭和二十二年五月頃までいたと思う。住まいは木造二階建て、一部鉄筋コンクリート三階建もあった。A B二カ所のラーゲルで約一万人の日本人がいたと聞く。

労役は原木運搬、コルホーズの農作業、木材伐採、薪割りなどで、寒さと飢えの中でよくぞ耐えられたものと、今さら感慨無量である。

4

食糧の配給基準

ソ連労働者との作業が多く、それほど重労働ではなかった。作業現場への移動はトラックで民間人が誘導して、監視兵はいなかった。朝夕の点呼もなく、日時を定めて自由に入浴場へ行くことができた。

一人当たり一日の食糧配給基準は次の通りであるが、米・雑穀類は少なく、その代わりジャガイモ、ニラ、黒パンなどで、殆ど規定通りではなかった。ただ、タバコ一日当たり十五本、砂糖一日三〇グラムの基準量と、月十ルーブルの紙幣をくれることは確実に守られていた。

一日当たり一人の配給基準

米一〇〇グラム、雑穀三〇〇グラム、黒パン三〇〇グラム、肉七五グラム、魚八〇グラム、野菜六〇〇グラム、バター二〇グラム、砂糖三〇グラム、味噌一五グラム、茶三グラム、油五グラム

5 衣服については、八月九日戦鬪に参加した時の着たままで、夏服のみで寒さには苦しんだ。防寒具を若干補給されたのみで、下着には特に困った。

6 作業のノルマはそれほど過重とは思わなかった。普通の体力であれば八時間かけたら可能な内容であった。

七、帰還

昭和二十三年六月二日カザンを貨車で出発して、ナホトカに集結した後、第五梯団として「英彦丸」に乗船、七月二日舞鶴港に上陸して復員となる。船内は至つて平穏であつたように記憶している。舞鶴港の栈橋で婦人会の方に、日の丸の旗を振つて「ご苦労さまでした」と言われ、お茶の接待を受けた時は「これ本当か」と思った。

八、帰還後の生活

1 昭和二十三年七月復員後、休職のままだった大阪中央電信局に退職手続をした。

2 昭和二十三年九月十七日、当時の七栗村役場

に奉職。その後昭和三十年三月市町村合併により久居町役場。昭和四十五年八月市制施行に伴い、久居市役所に職員として継続して勤務。昭和五十五年十月、久居市教育長の職を最後に退職した。その間順調に過ごすことができたことを感謝している。

3 現在、全国強制抑留者協会三重県支部長の仕事のほか、各種団体、機関の役員を依頼されて東奔西走している毎日である。

シベリア抑留記

三重県 東 真道

一、出生

大正九（一九二〇）年十二月十八日、飯南郡漕代村稲木（現在 松阪市稲木町）

「永木寺」、父大野法運・母たまの次男として出生。